

不登校の状態像に関する研究 ——性格と対人関係に着目した大学生へのインタビュー——

A Study on the State of School non-attendance : The Interview of Focusing on the Personality and Interpersonal Relations on College Students

小 松 藍 生

【問題】

文部科学省（2003）によると、不登校は「何らかの心理的・情緒的・身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるために、年間30日以上欠席することで、病気や経済的理由を除いたもの」と定義されている。

また、文部科学省の調査等によると（2011）、小・中学校での不登校者数は前年度より減っている。五十嵐・萩原（2004）が、その減少の1要因として、不登校状態の多様化をあげている。従来の不登校の分類の一つでは①神経症的なもの、②精神障害によるもの、③怠学傾向のもの、④積極的・意図的なもの、⑤一過性なものがあった（小泉，1973）。それに石川（2000）は、「在宅解放型」（自宅にいるがひきこもらず、友人が遊びにすれば受け入れるもの）、「非在宅校内型」（登校後に保健室等で過ごすもの）、「非在宅校外型」（登校しても授業に出ず友人と遊んだりするもの）を追加している。そして、この三つが近年では増加していると述べている。なかでも「非在宅校内型」は今のところ、上記の文部科学省（2003）の不登校の定義に含まれない。つまり、一概に不登校者数が減っているとは言えないのではないだろうか。

不登校の要因は、本人の問題（性格など）、家庭環境、学校環境など様々なものが考えら

れる。さらに、不登校の状態が継続している間にもその要因などが時間の経過とともに変化するなどから、不登校の要因は一つに特定できないことも多い（文部科学省，2003）。その中で、不登校と本人の問題の一つである性格には何らかの相関関係があるように思われる。実際、時代の推移に伴う不登校の状態像の変化があるのに、これまで行われてきた登校拒否児の性格特性についての研究を見ると、一定の傾向があると考えられる（東條，1995）。初期に指摘された性格傾向において、まず佐藤（1968）は、学級担任の評価に基づいて性格や行動の特性をまとめている。一番多いのが「素直・まじめ」であり、続いて「小心・弱気・心配性」、「無口」、「わがまま」、「消極的」、「無力的」、「内向的」などが順に多かった。さらに少ないが、「友達が少ない」、「非協力的」、「依頼心」、「几帳面」、「態度が明るい」もあった。基本的にこの時代から、「素直・まじめ」を除けば、不登校児の性格の特徴が社会的場面における受動性と考えられることができる。また、稲村（1994）の研究によれば、不登校児本人の性格で最も多いものとして「過敏・心配性」があげられた。続いて、「完璧主義・几帳面」、「自己中心・わがまま」、「小心」、「非社会的」が続いた。

しかし、花谷・高橋（2004）によれば、1998年に文部省が「登校拒否についての認識の転換」について、登校拒否となった児童

の性格傾向に何らかの問題があるとされたが様々な要因が作用すれば、どの子どもも登校拒否となりうると述べている。そして、1970年代から不登校と性格に関する研究は増えていない。

【目的】

本研究では、不登校を文部科学省（2003）の定義を使用し、現代の不登校における性格と周囲環境、対人関係での状態像を検討する。不登校の多様化を把握し、その関連要因や状態像を検討するのは解決策模索のために重要と考えられる。

【方法】

まず、インタビューの協力者を選ぶため、質問紙調査を行った。対象は大学生とし、質問紙は、前述した不登校の定義を提示し、①性別・学年・年齢、②不登校経験の有無、③不登校経験の時期・期間・頻度・そのときの状態（不登校経験者のみ）、④「不登校傾向尺度」（五十嵐・荻原，2004）を過去形に改変した項目、⑤インタビュー調査の協力依頼（名前・メールアドレス）という内容だった。質問紙調査は4年制大学の授業で実施した。最終的に3名の不登校経験者に協力が得られ、インタビューを行った。場所はプライバシーが保たれるよう、同大学の心理学実験室などを利用した。Aさんは、1回のインタビューでの不十分な部分の補足のため、2回行った。

インタビュー協力者の概要は、表1の通りであった。また、不登校をインタビューで聞くには、渦中の生徒に聞くよりも乗り越えた経験として語る方が、その経験からより適切な距離をもって、客観的に話せられたため、対象を不登校経験者とした。

本研究の目的に基づき、同意書とインタビューガイドを作り（表2参照）、個別の半

表1. インタビュー協力者・フェイスシート

名前	不登校の時期・期間・頻度
Aさん	小5, 6、週2, 3回休んだ。
Bさん	中1後半、約1か月、週に3日休んだ。
Cさん	小5の1年間と中3の数か月休んだ。

表2. インタビューガイド

- ・不登校の経験時期
- ・不登校の期間・頻度
- ・不登校の経緯
- ・不登校になったきっかけ
- ・不登校最中の過ごし方（食事などの日常生活）
- ・周囲の人々の対応（家族・先生・友達など）
- ・不登校の経験後、どうなったか？
- ・不登校体験の影響で思うこと
- ・不登校体験の際、何を感じていたか？
- ・不登校になって、どういう思いになったか？
- ・体験に関し思い当たる理由
- ・性格と不登校の関連で考えていること

構造化インタビューを行った。

インタビュー時期は2013年10月中であった。協力者の許可を得て、ICレコーダーに内容を録音した。語りで、性格や対人関係が関連すると調査者が判断した際は、その内容を詳細に聞いた。

また、協力者に、不登校は様々な体験があるが、一括して「不登校」という言葉を使うと伝えた。インタビューで無理のない範囲で答えてもらうこと、質問や不都合があればいつでも対応するので遠慮なく言ってほしいことも伝えた。

分析方法は、インタビューをICレコーダーに録音したものを逐語記録にし、個人情報を含む内容は、個人が特定されないよう、語りの本質を損ねない範囲で改変した。コード化は、意味や内容を分析するのに細かくせず、カテゴリー化をした。そして、それぞれで最終的なカテゴリーやコード間の関係をふまえ、模式図を作成した。

【結果】

Aさんの場合

Aさんのインタビューの結果を図1のようにまとめた。最大カテゴリーで、不登校の最中は、◎人との関わり方、と◎自分のもともとの考え方に分けられた。不登校以降に関しては、◎続く人への不信感、◎対人関係を出来るだけ広くつなげていきたい、◎人の心をよく知りたいというものに分類された。

不登校以降は、次がコードになるので、先に説明する。◎続く人への不信感のカテゴリーは、【経験の影響を深く考えたことはないが、周りの人がどう思ってるか、嫌な目で見ていると思った】、【不登校経験のあと、自分にどんな印象を持っているかと考え、あいつダメなやつだと思っているとネガティブに思っていた】があった。

◎対人関係を出来るだけ広くつなげていきたいは、【脱したきっかけは、中学校は色々な人とかが集まるので、環境が変わって行けたのもあったし、友達が増えて一緒にいたかったので、回を重ねるごとに行くことができるようになった】、【小学校ではあまりなかったが、中学校に入ってから友達を作っていこうと思ったので、それが高校にも続いて、対人関係もできるだけ広くつなげていこうと思って変わっていった】が存在した。

◎人の心をよく知りたいのカテゴリーは、【いじめられた経験で人の心がどう動くかにすごく興味を持ち、興味のある学科があって、入学しようと思った】があった。

不登校の最中は、2番目に大きいカテゴリーとして、[友への不信・信頼]、[人前に出る・外出することへの葛藤]、[家族それぞれを認める]、[内気・楽観]に分けられた。

[友への不信・信頼]は、①[自分へのいじめに対する怒り・憎しみ]、②[クラスへの不信感]、③[信頼できる友達]、④[自分へのいじめの頻度が増えて辛かった]に分類

された。

①[自分へのいじめに対する怒り・憎しみ]には、【いじめられていた以外、不登校の原因はないと思ったのは、悪いことをしたからいじめられるならわかるが、悪いことをしていないのに、向こうから一方的にやられるので、なんでだと思った】、【いじめてくる相手を憎んだり、こいつなんていなければいいと思ったりした】があった。

②[クラスへの不信感]に関しては、【友達の反応が結構冷たかったし、きつかった】、【いじめられてる中で、周りの人がただ見てるだけで、その人たちも冷めたような目で見て、この人たちは何もしてくれないんだと思ったときに、きつかったし、信用できないと思った】、【明らかにいじめが行われているのに、何もなかったように話して、周りが傍観者という感じ】、【具体的にクラスの人が何かしたわけじゃないからきつかった】が存在した。

③[信頼できる友達]は、【学校は凄く行きたくないという思いが募ったし、いじめてくるクラスの人でも嫌な感じで、あまり話したくなかったが、仲良くしてくれる人がいた】、【そういう友達がいたことは、学校に行きたかったり、助かったことでもある】、【いじめられてるとき、普通に話しかけてきてくれた友達の対応は、変わらなかった】、【いじめられたときやそのあと、「大丈夫?」とか「一緒に遊ぼう。」と声をかけてくれた】、【手紙を届けてくれたことと声をかけてくれたことはありがたいし、自分がいじめられてても、この人は大丈夫だ、何があっても一緒にいてくれる人だという信用や安心感があった】があった。

④[自分へのいじめの頻度が増えて辛かった]は、【きっかけは、学校でいじめを受けて、周りの友達がいじめをするから、もう辛くて行けなくなった】、【小学校高学年だけでなく3、4年も、多少いじめはあったが学校に普通に行けてたし大丈夫だった。5、6年になり周りがいじめることにきつくなって、

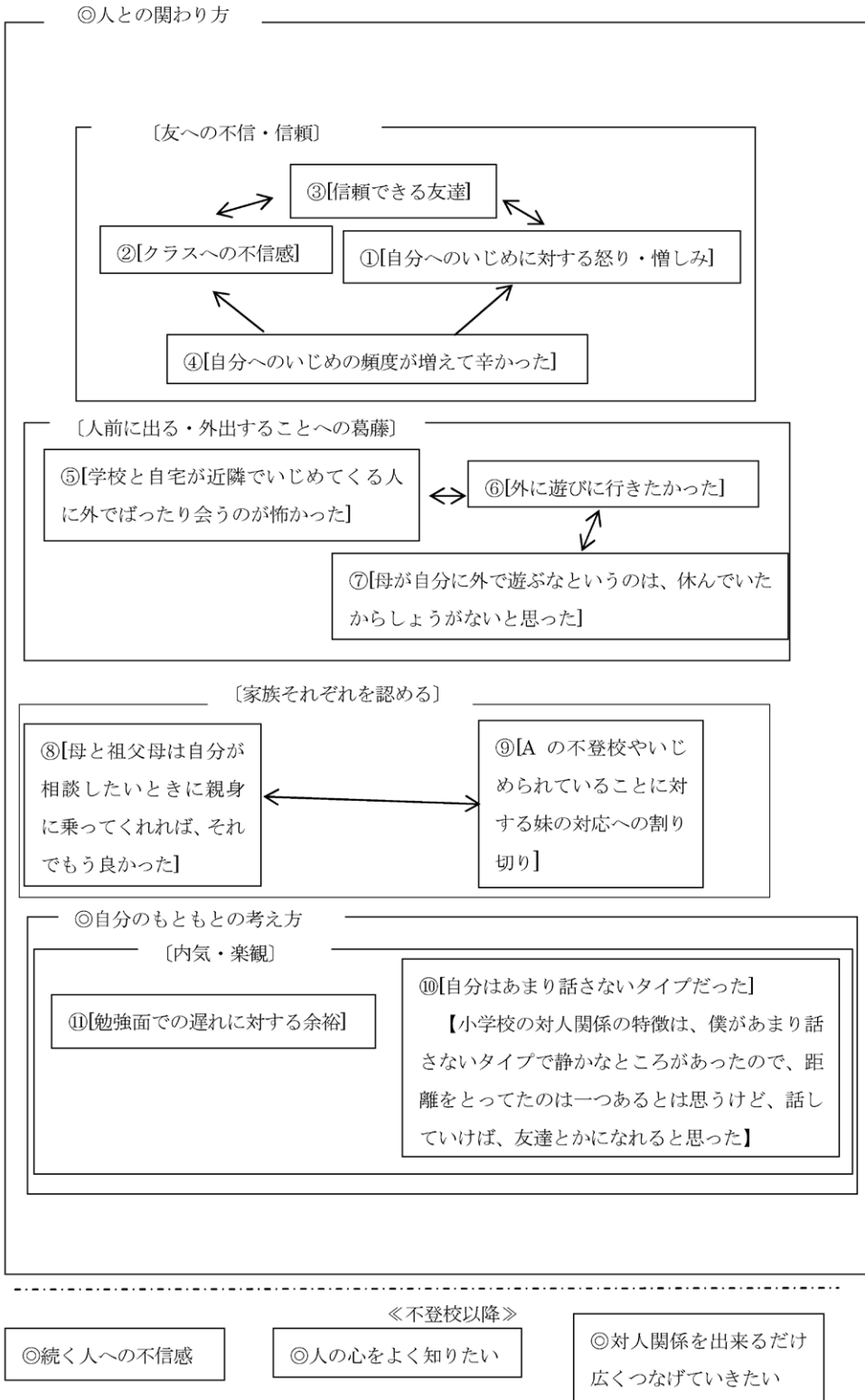


図1. Aさんのインタビューの最終結果

嫌になって行けなくなった】、【なんでこんな経験ばかりと思って辛かったし、自分なんていなければいいんじゃないかと思ったりした】、【少なくとも学校に自分の居場所と呼べるべき場所はないと思ったりした】、【不登校のきっかけは、周りの友達にいじめとか悪口を言われたりするのが辛かったのと、その人とあまり一緒にいたくないことだった】、【3、4年の時はいじめもそんなにきつくなかったし、自分では我慢できる範囲で5、6年になっていじめが毎日のように頻繁に起こり行けなくなった。】、【3、4年の時と5、6年では、いじめの頻度が少し変わった】、【3、4年の時と5、6年の時といじめられてる内容は基本的に悪口を言われることだったから、あまり変わっていなかった】、【5、6年の時の方がいじめられる頻度が多くなってきて、きつくなってしまった】が存在した。

〔人前が出る・外出することへの葛藤〕というカテゴリーは、⑤〔学校と自宅が近隣でいじめてくる人に外でばったり会うのが怖かった〕、⑥〔外に遊びに行きたかった〕、⑦〔母が自分に外で遊ぶなというのは、休んでいたからしょうがないと思った〕に分けられた。

⑤〔学校と自宅の近隣でいじめてくる人に外でばったり会うのが怖かった〕のカテゴリーは、【暇でしょうがなく遊びに行きたいという思いはあったが、家と学校が歩いて5分かからないところだったので、いじめてくる人とばったり会ったらちょっと嫌で怖かったので、遊びに行くことはなかった】のコードであった。

⑥〔外に遊びに行きたかった〕のカテゴリーは、【母親に言われても、自分も別に学校に行かなくて遊びに行ったらいいんじゃないかと思ったりした】のコードがあった。

さらに、⑦〔母が自分に外で遊ぶなというのは、休んでいたからしょうがないと思った〕のカテゴリーは、【親が基本的に、学校に行

かない日は友達と遊ぶのは、学校を休んでいるからだめだと言った】、【母親の言っていたことは基本的に従ってた】、【母親は、基本的に休む時といたら風邪等がほとんどだが、不登校が理由で遊びに行くのはちょっと許せない面があったみたいで、そんな遊ぶ元気があるなら、ちゃんと学校行きなさいという母親で、休んだからしょうがないと受けとめた】が存在した。

〔家族それぞれを認める〕のカテゴリーでは、⑧〔母と祖父母は自分が相談したいときに親身に乘ってくれば良かった〕、⑨〔妹の対応への割り切り〕に分けられた。

⑧〔母と祖父母は自分が相談したいときに親身に乘ってくれば良かった〕は、【母親はよく話を聞いてくれて、先生もよく親身になって聞いてくれて、すごく優しくかったし、学校に行かなかったり、たまに学校に行った時も「大丈夫か？」と声をかけてくれた】、【祖父母が家が隣なので、相談にのってもらって、真剣に考えてくれて、親身になって話を聞いてくれた。祖父が家に来て、「大丈夫か？」と声をかけてくれたり、祖母も日中の仕事が終わってから、家によって「大丈夫かい？」と聞いてくれた】、【母親、祖父母の対応に関して、休んでる最中に嬉しかったと感じることはあまりなかった。別にそのままでいいというか、自分が相談したいときにちゃんと親身に相談に乗ってくればいい】、【母親や祖父母は、相談に乗ってほしいときに、忙しさなどで乗ってくれないことはなかった】、【母親や祖父母に、自分が相談や頼みごとがあるときに、基本的にいいと答えてくれれば、ほかはある程度気にしなかった】、【祖父母は母親より家にいる時間も多かったので、僕も家がすぐ隣でちょっと遊びに行ったときに、基本的に相談に乗ってくれて、同じようなスタンスで接してくれた】、【基本的に母親や祖父母に対して、もうちょっと対応してくれてもいいのにと、むかつくと思わなかった】

があった。

⑨ [Aの不登校やいじめられていることに対する妹の対応への割り切り] については、【妹は何も変わらず、ほくがいじめられてることに全然ノータッチで、普通に自身の学校生活を送っていた】、【妹は基本的に何も言わず、そのことに対しノータッチだった】、【妹の反応に特に思っていたことはないし、気にしていない】、【妹は妹で生きる環境があって、その環境で生きてる人にしかわからないことで、自分は自分の環境で生きていくことでしかわからないこととか、妹がどういう対応をしようがあまり関係なかったし特に感じることはなかった】が存在した。

〔内気・楽観〕のカテゴリーには、⑩ [自分はあまり話さないタイプだった]、⑪ [勉強面での遅れに対する余裕] に分けられた。

⑩ [自分はあまり話さないタイプだった] には、【小学校での対人関係の特徴は、僕があまり話さないタイプで静かだったので、距離をとってたのは一つあると思うけど、話していけば、友達になれると思ったりした】があった。

⑪ [勉強面での遅れに対する余裕] は、【休んでいて、勉強が遅れたりしないかと思ったことはあるけど、授業を聞いていく中で取り返しできると思ったから、あまり勉強は心配しなかった】、【学校に行ったときや家で勉強すれば、なんとかなるという感じだった】があった。

③ [信頼できる友達] のカテゴリーは、① [自分に対するいじめへの怒り・憎しみ] と② [クラスへの不信感] のカテゴリーと相反する。次に、④ [自分に対するいじめの頻度が増えて辛かった] というカテゴリーが理由となり、① [自分に対するいじめへの怒り・憎しみ] と② [クラスへの不信感] が生じた。続いて、⑥ [外に遊びに行きたかった] のカテゴリーは、⑤ [学校と自宅が近隣でいじめてくる人に外でばったり会うのが怖かった]

と⑦ [母が自分に外で遊ぶなというのは、休んでいたからしょうがないと思った] と対立している。さらに、⑧ [母と祖父母は自分が相談したいときに親身に乘ってくれば、それでも良かった] と⑨ [妹の対応への割り切り] も対立している。また、独立して、⑩ [自分はあまり話さないタイプだった] と⑪ [勉強面での遅れに対する余裕] が存在する。不登校以降として、独立して、◎続く人への不信感、◎対人関係を出来るだけ広くつなげていきたい、◎人の心をよく知りたいがあった。

Bさんの場合

Bさんのインタビュー結果を図2のようにまとめた。不登校中は、〔家族・学校に対する不信・信頼〕、〔Bさんを取り巻く状況〕、〔自分のももとの考え方〕に、不登校以降は、〔学校へ行くことへの面倒くささから逃げない〕、〔人との関係を良好にしたい〕だった。

不登校以降を説明すると、〔学校へ行くことへの面倒くささから逃げない〕には、【不登校の影響として、高校生の時、少し嫌なことがあったら休んでもいいという気分になってしまったことが度々あった。中一で学校に行かなかったことを思い出し、やめようと思った】、【高校への休む連絡も面倒くさいから、休んでもいいと思うことをやめようとしたことに、少し不登校経験が活かされたと思う】、【大学の○という授業が面倒くさくて担当が少し嫌で会いたくないと思うけど、やっぱり行かないと情報が少なくなるし行かないと思った】があった。

〔人との関係を良好にしたい〕は、【その学科ははき違えていたが、心理という言葉がついていて、心理学を学べば、人と関係をうまく築けるようになるのではと思って入学した】があった。

〔家族・学校に対する不信・信頼〕は、③ [父への嫌悪・恐怖]、⑤ [信用できない敵]、⑥ [信頼できる存在がいた]、⑦ [学校への怒り・

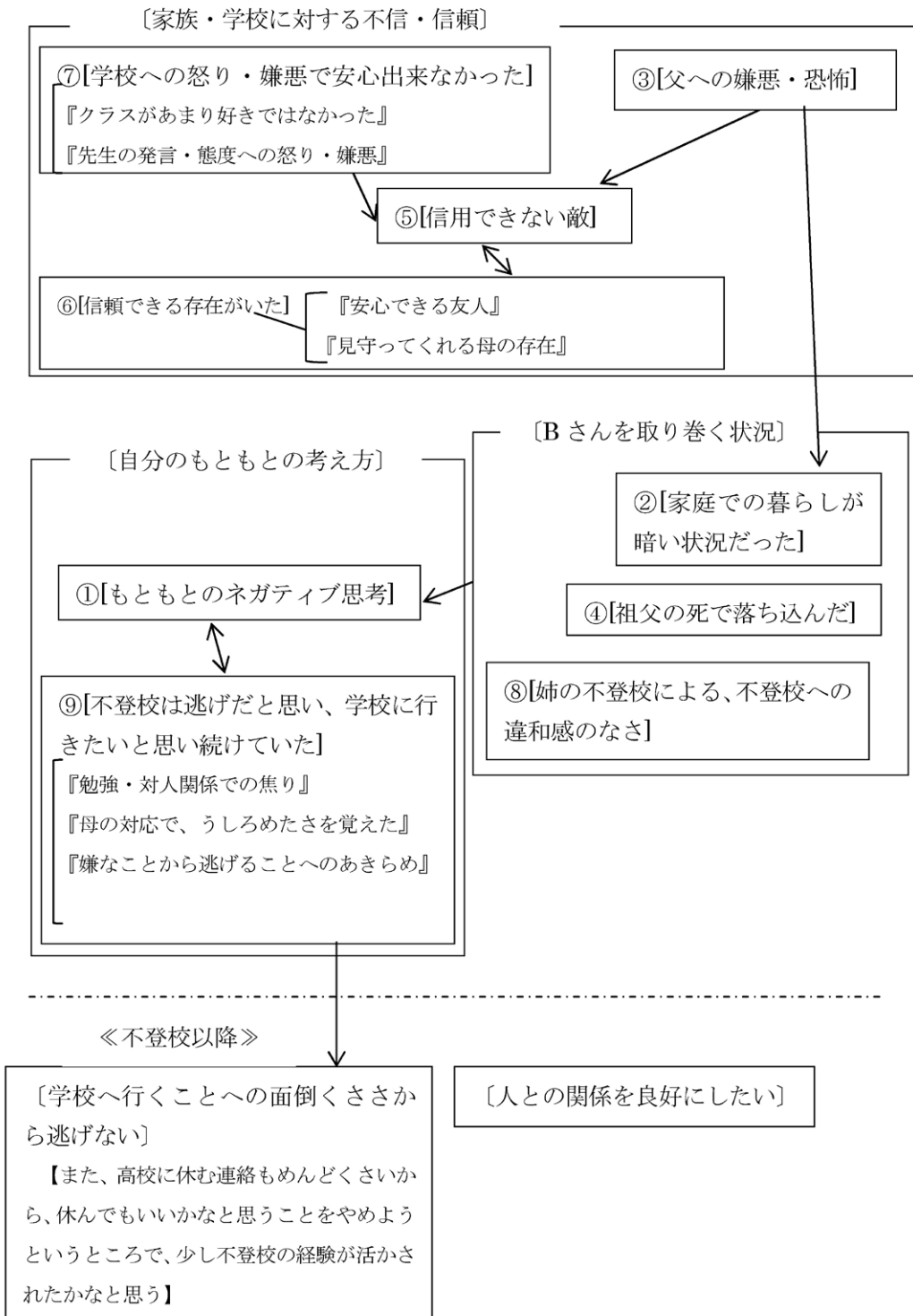


図2. Bさんのインタビューの最終結果

嫌悪で安心出来なかった]になった。

③ [父への嫌悪・恐怖]は、【父親がギャンブル好きで短気で、母親も私も姉も、結構嫌って、家族じゃないと思った。普段からマイナス要素があって、自分が暗くなった。それが常にある状態+祖父の死がきた】、【不登校よりは父親が帰る恐怖が大きく、母親もそれに神経を使ったから、食事でどうこうはなかった】、【父親の恐怖から緊張感がいつもあり、こういうことしたらダメだとか、怒られると結構考えてた】、【周りの人の反応を自分よりも気にしてしまう】、【父親が少し頭をよぎったら、これはしてはいけないとか、近寄らないようにしようとするばかりだった】、【自分のしたいことも抑えるという感じだ】、【自由がないという感じだ】が存在した。

⑤ [信用できない敵]は、【家も父親がいたら安心できないし、学校も安心できなかった】、【周りは敵という気持ちが結構強かったし、家でも母親は味方だが、父親ばかりが見えて敵に思えて、学校に行ってもあまり人が信用できなかった】、【友達は大丈夫だったが、ほかの陰湿な人や先生も途中から少し敵に見え出して、こんなもんか、みたいなのはあった】が存在した。

⑥ [信頼できる存在がいた]は、『安心できる友人』と『見守ってくれる母の存在』に分類した。まず、一つ目の『安心できる友人』は、【学校行って結構歓迎してくれる優しい友達で、クラスの人もそんなに悪い反応はせず、良かった記憶がある】、【小学校からずっと仲良くしてくれる子が違うクラスにいたが、「どうしたの？大丈夫だった？」と普通に来てくれて、学校に戻れたと思った】、【「え？何これ？」という反応をされたら、学校に戻れなかったと思う】のコードだった。二つ目の『見守ってくれる母の存在』は、【父親は不登校を気づいていたのかわからないが、母親も割と私たちを守ってくれる派なので、父親に言ってなかったと思う】、【母親は朝は「また

か。」と言うが、あとは何も言わなかった。一回だけ、午後に「明日もこんな感じなの？」と言われたが、それ以外は見守ってくれた】だった。

⑦ [学校への怒り・嫌悪で安心出来なかった]に関しても、『クラスがあまり好きではなかった』と『先生の発言・態度への怒り・嫌悪』のサブカテゴリーに分けられたため、一つずつ説明する。『クラスがあまり好きではなかった』は、【もともと中一のクラスがあまり好きではなかったが、何かあったわけではない】、【冬休み明けもあったかもしれないが、特に何か学校で事件が起きた感じではない】、【いじめられたり、授業についていくのが辛くなったわけではない】、【あまりそのときのクラスが好きじゃなかったのはあるが、何か事件があったわけではない】、【クラスで知らない人たちも結構いて、K中学自体の雰囲気が悪いと言われていて、陰湿な人もいて、何かされてはいるが、雰囲気が嫌だと思った】、【不穏というか、学級をまとめる役割の学級委員長の子に周りの子たちが威張っていると感じ、外見の悪口を言うのを聞いていた】、【クラスで机を蹴ったり、椅子を蹴ったり、古典的なものを見た】が存在した。二つ目の『先生の発言・態度への怒り・嫌悪』は、【最初、2、3日休んだ後に、学校に1回行って、友達と話していたら、友達から「担任の先生が『また、どうせ来ないんじゃない？』と昨日、言ってたよ。」と話し、腹が立って、「嫌だ。」と思い、また休んじゃった】、【担任が私がいけない時に「また、どうせ来ないんじゃない？」と言っただけで、ほかでは何も言われなかった】、【先生も普段通りな感じで、「また、どうせ来ないんじゃない？」と言われ逆にもかついた】、【先生に「また、どうせ来ないんじゃない？」と言われると、中学生だし考えちゃう】、【中学生は特に敏感に反応するし、先生に言われると考えちゃう】が存在した。

【Bさんを取り巻く状況】は② [家庭の暮

らしが暗い状況だった]、④ [祖父の死で落ち込んだ]、⑧ [姉の不登校による、不登校への違和感のなさ] に分類された。

② [家庭での暮らしが暗い状況だった] のカテゴリーでは、【小学生から、夏休みや冬休みになったら、祖母と祖父のN（地名）にある母親の実家に行けることだけが私の逃げ道だったので、普段は家の中も嫌で暗めに過ごした】があった。

④ [祖父の死で落ち込んだ] は、【その前年の11月に、祖父が亡くなり、初めて親族が亡くなって、それから虚無感に襲われた】、【祖父が亡くなって虚無感がきて、学校に行けなくなった】、【不登校のきっかけで思い当たるのは、11月に祖父が亡くなったっていうくらい】、【亡くなった日にお見舞いに行こうと話していたが行けなかった】、【私たちは今札幌に住んでいて、母の実家がNにあるが、Nに住む従弟などはお見舞いに行けたのに、行けなかった】、【お見舞いに行けなかったのがすごく申し訳ない気持ちや残念な気持ちもあって、すごく後悔が強かった気がする】、【不登校のきっかけははっきりわからないが、おそらく祖父が11月に亡くなって体調や心が疲れた】があった。

⑧ [姉の不登校による、不登校への違和感のなさ] では、【姉が学校を休むときもあって、私は休みたいんだったら休めば?】とあっており、姉に対し無反応で普段通りだった。そういう気質だと思う】、【姉は私の一個上だが、姉が学校に行けなかったのは、中学生だったと思う】、【姉が学校に行けなかった時期は割と自分が学校に行けなかった時期と近い気もするし、他人事のように、立て続けに起こっていると思った】、【姉の雰囲気を感じ取り、不登校はこんな感じかと少し思った】、【姉に続き、中学生の自分も不登校になると思った】になり、

【自分のもともとの考え方】は、① [もともとのネガティブ思考]、⑨ [不登校は逃げだと思ひ、学校に行きたいと思ひ続けた] に

分類された。

① [もともとのネガティブ思考] のカテゴリーは、【結構人見知りである】、【小2に今のところに落ち着いたが、父親の転勤で、転校ばかりして人見知りもあり、あまり友達を作れないと思ひ込んでた】、【中学に上がった時も小学校の友達は結構話してくれたけど、自分から行けなかった】、【性格でネガティブ思考が不登校と関連しているかも】、【今は少しマシになった方で、中学生では鬱っぽい気質もあった】、【性格が結構暗かった】、【鬱っぽいとはネガティブな気持ち】が存在した。

⑨ [不登校は逃げだと思ひ、学校に行きたいと思ひ続けていた] は、『勉強・対人関係での焦り』、『母の対応でうしろめたさを覚えた』、『嫌なことから逃げることのあきらめ』に分類された。『勉強・対人関係での焦り』は、【学校に行けなくなったとき、中学校でも何日以上休んだらダメというのを気にして、特に英語の授業についていけなくなると思ひてしまひて学校に行つた】、【勉強面で、このままだ学校を休んだらやばいと思ひつた】、【学校にいかずゲームをやつた間もほかのみんなは学校で勉強したり、話したり、新たなことがあるなどが繰り返されてると思ひ、置いてかれてしまひ焦りもあつた】、【友達関係も遅れてしまひと思ひつた】、【勉強と同じくらい、友達関係もおいてくれたらどうしようと思ひつた】、【友達は少し関係が深まつたり、日々新しいし、私がかでこうしてる間にみんなは…】と思ひつた】が存在した。『母の対応でうしろめたさを覚えた』は、【お母さんは朝学校に電話をかけなきゃならなくて、嫌だと言われたし、雰囲気はずつと醸してつた】、【母親は朝電話かけるとき、怒つてないが顔が暗いし、「またか。」と嫌そうな顔をして、私が起きたら、ため息をされて、母親に「また、そういう感じなんでしょ?」、「頭が痛いとか言うんでしょ?」と言われた気がする】、【母が朝に学校に電話をかけるのが嫌なのが私もわ

かったので、苦労させたいしろめたさがあった】だった。三つ目の『嫌なことから逃げることへのあきらめ』は、【学校に行って少し緊張はあったし、学校に行くまでの道や教室に着くまで、学校に来ちゃったと思った】、【学校は怖かったが若干あきらめもあった気もする】、【私は不登校で逃げていて、逃げることでしか自分を守れないと思った】、【逃げることでしか自分を守れないと思ったが、やめて、学校に来たあきらめがあった】、【不登校で逃げてると思ったのは、何もしてない、家にいる自体がそうだとは思うけど、自分からアクションを起こさない、学校で嫌なことがあったと思う】だった。

① [ももとのネガティブ思考] には、② [家庭での暮らしが暗い状況だった]が、②に、③ [父への嫌悪・恐怖] が影響している。③と⑦ [学校への怒り・嫌悪で安心出来なかった] は、⑤ [信用できない敵] へ影響している。⑤と⑥ [信頼できる存在がいた]は対立し、① [ももとのネガティブ思考] は⑨ [不登校は逃げだと思ひ、学校に行きたいと思ひ続けていた] と対立する。不登校以降の [学校へ行くことへの面倒くささから逃げない] は⑨ [不登校は逃げだと思ひ、学校に行きたいと思ひ続けていた] が影響している。独立して、[人との関係を良好にしたい] がある。

Cさんの場合

Cさんのインタビューの結果を図3のようにまとめた。Cさんでは、小学5年生の時と中学3年生の時の不登校、それ以降に分けた。

小学5年生では、最大のカテゴリーで、[家族・学校への不信・信頼]、[自分のももとの考え方]、[学校に行きたい] に分けられた。

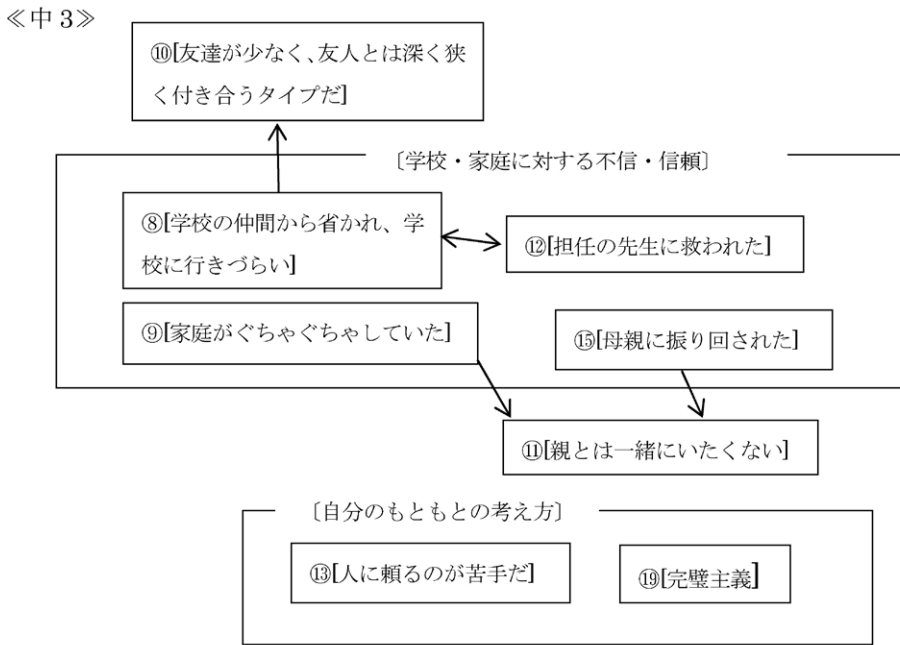
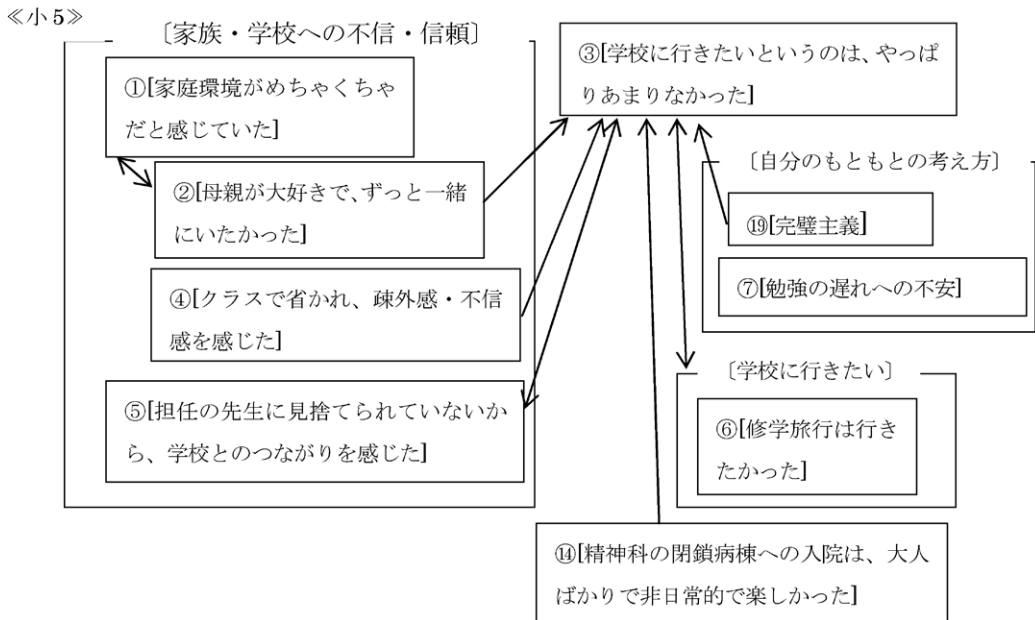
そして、① [家庭環境がめちゃくちゃだと感じていた]、② [母親が大好きで、ずっと一緒にいたかった]、③ [学校に行きたいというのは、やっぱりあまりなかった]、④ [クラスで省かれ、疎外感・不信感を感じた]、

⑤ [担任の先生に見捨てられていないから、学校とのつながりを感じた]、⑥ [修学旅行は行きたかった]、⑦ [勉強の遅れへの不安]、⑧ [精神科の閉鎖病棟への入院は、大人ばかりで非日常的で楽しかった]、⑨ [完璧主義] に分類された。

[家族・学校への不信・信頼] は① [家庭環境がめちゃくちゃだと感じていた]、② [母親が大好きで、ずっと一緒にいたかった]、④ [クラスで省かれて、疎外感・不信感を感じた]、⑤ [担任の先生に見捨てられていないから、学校とのつながりを感じた] のサブカテゴリーに分類された。

① [家庭環境がめちゃくちゃだと感じていた] は、【母親が、私が幼稚園の時からずっと、うつ病で入院を繰り返した】、【私も最初は母親と二人暮らしだったが、祖父母の家や親戚の家に行ったりで家庭環境がめちゃくちゃだった】、【母親と二人暮らしで祖父母や親戚の家に行った時期にちょうど重なり、母親が入院した。私が小学生で一人暮らしが出来ないから、一緒に精神科の閉鎖病棟に母親と入院することになり、学校に通える距離でないので完全に行っていない状態だった】、【母親は私が小学校低学年のときも小学5年生の時も入院をずっと繰り返していた】だった。

② [母親が大好きで、ずっと一緒にいたかった] は、【私が小学校低学年や5年生の時に、母親にほとんど育児放棄の様な状態を受けたが、やっぱり母親が好きで、無条件に一緒に住みたい、なんでお母さんと一緒に住めないの？と、何回も祖父母と喧嘩があった】、【家で母親として学校に行けなかったときに、それはそれで苦痛だと思ったが、強かったのは中学生以降で、小学校の時とはとにかくお母さんと一緒に住みたいのに住めないし、なんで一緒にいけないの？という思いが強かった。多少母の彼氏がいようと一緒にいることに意味があったので、一緒にいれることで腑に落ちたような気がする】だった。



《不登校以降》



図3. Cさんのインタビューの最終結果

④ [クラスで省かれ、疎外感・不信感を感じた] は、【いじめまではいかないが、学校で夏休みの予定表を書いた時、私は絵を書くのがすごく好きだったので、色を塗ったのが多分、上手かったのか、先生に勝手にお手本にされた。みんなの前で発表されたり、ひいきじゃないが、自分がそうして欲しくはなかったのにそうされた】、【クラスの代表委員にみんながなれと言ひ、自薦・他薦問わないし、変な特別扱いをされた】、【友達がみんな下の名前で呼び合うのに私だけ苗字で呼ばれて、下の名前で呼んでほしいのにずっと男子も女子も苗字で呼ばれて、それがなんとなく疎外感があった】、【先生にひいきにされて、それでクラスの学級委員にみんながなれと言ひ、苗字で呼ばれたり疎外感があったのは覚えている。学校があまり自分にとって楽しい場所ではなく、友達がいなかったわけではないし、登下校を一緒にする友達もいた。その中で先生に特別扱いされる私を見て面白くない子もいた。そういう子にハブられるみたいに、仲間に入れてもらえないみたいなこともあった。学校に行かない方が自分も楽だったと思う】、【確実にいじめられたわけではないけど、妙に空気がそうになって疎外感があった】、【クラスの友達から誕生日メッセージがきて、後からあまり嬉しくなかった気がする】、【友達に会いたい、遊びたいというのがなかったので、私をハブってる子たちも嫌ってた子たちも誕生日のメッセージを書いていて、そんなこと絶対思っただろうと私は思った。無理やり感、先生に言われて書いたって感じがすごくしたので、全員がそうじゃないと思うが、素直に喜んで受け取れなかった】があった。⑤ [担任の先生に見捨てられていないから、学校とのつながりを感じた] に関して、【ほとんど家や病院にいて、ちょうど私が5、6年生のときの担任の先生と一緒に、私が学校に行っていないから担任が変わるのもあれだったのかもしれない。その

先生が私が学校に行っていない間、一日も欠かさず、仕事終わりに私の家にきてくれたから、学校とのつながりがあった】、【小学校5、6年の担任の先生もすごく熱心な方だったので、私の誕生日に、学校に行っていなかったけど、クラス全員にメッセージを書かせて全部ファイリングして持ってきてくれた。先生を通してつながりはあったが、友達と会ったり遊んだりにはほほなかった】、【担任の先生が毎日必ず私の家に来たので、見捨てられてない、本当は学校行かなきゃいけないんだという気持ちはずっと持続してたのと思った】、【先生がクラス全員分のメッセージをファイリングして、先生もメッセージを書いて持ってきてくれたので、その出来事自体、やってくれた先生に対してはすごいありがたいと思った】、【小学校、中学校にしても先生に恵まれてたと今でも思う】というコードだった。[自分のもともとの考え方] は、⑩ [完璧主義] と⑦ [勉強の遅れへの不安] に分かれた。

⑩ [完璧主義] は、【不登校と性格との関連は、基本大雑把だが、こだわりたいところにすごく完璧主義がある】、【当たり前だが学校にずっと行っていたら毎日勉強して、授業出て、ノートを作って、プリントをうめていく。一日休んだらその分抜けてしまうし、遅れる。一回休んでしまうと授業に一時間分置いてかれるし、完璧にノートも作れないし、モチベーションも下がるし、やる気が失せる】、【学校に朝行こうと思ったが、もう授業が始まっていると、間に合う時間に行っても中途半端になるから、休むならその分まるまる休んでしまいたいし、行きたくない】、【受験前の中学のテストも順位がでるし、ずっと一位になりたかったが、3年間で二位か三位で、一位の人を抜かせなかった。当たり前だが、休んだ分があるし、毎日学校に行く人と何回も休む人で差がでるのはわかる。でも、完璧主義だから一位になりたくて、でも出来なくて、性格的にすっきりしないし、納得で

きないのも多少ある】があった。

⑦【勉強の遅れへの不安】は、【勉強に遅れることに不安はすごくあった】だった。

【学校に行きたい】は、⑥【修学旅行には行きなかった】のサブカテゴリーになった。

⑥【修学旅行には行きなかった】は、【私が小6の修学旅行は行きたいと言い、その時期に合わせて学校に戻った】、【小学校の時はあまり覚えてないが、修学旅行に行きたいと私が言い出したらしく、その時期に合わせて学校に戻った感じだ】の2つのコードだった。

また、独立した⑭【精神科の閉鎖病棟への入院では、大人ばかりで非日常的で楽しかった】は、【あまり覚えてないが、小5で入院した時、小学生で精神科の閉鎖病棟に入るのが異例の出来事だったらしい。周りも大人ばかりで、でも閉鎖病棟での生活は、母親もいたし勉強しなきゃいけないとか、先生が毎日来る環境でもなく非日常的で、すごく楽しかった】のコードがあった。

独立する③【学校に行きたいのはあまりなかった】について、【小学5年の時、学校に行きたいのはあまりなかった】、【もう、学校はどうでもいいと思ったりはもちろんあった】が存在した。

次に、中学3年生の最大カテゴリーで、【学校・家庭に対する不信・信頼】、【自分のもともとの考え方】のサブカテゴリーがあった。【学校・家庭に対する不信・信頼】は、⑧【学校の仲間から省かれ、学校に行きづらい】、⑨【家庭がぐちゃぐちゃしていた】、⑫【担任の先生に救われた】、⑮【母親に振り回された】のサブカテゴリーを含んだ。

⑧【学校の仲間から省かれ、学校に行きづらい】に関して、【中3の不登校のきっかけはいじめかわからない。吹奏楽の部活で私が中2の時にコンクールがあり、一個上の先輩が同じパートに一人いた。その先輩にとって最後のコンクールだったが、その先輩が当たったパートを上手くふけず、直前になって

そのパートが私が吹くように先生に言われた。先輩はそれが面白くなく、私は横取りしたいと思わなかったのに先輩が泣いた。他の先輩たちも私が調子のっていると思い、挨拶しても一切挨拶してくれなかった。先輩たちがいなくなっても、その出来事を見ていたり、先輩と仲がいい同級生も私が調子のっている」と感じたようだ。部活の中でも私がそのパートリーダーになるはずだったが、なぜか違う人がなったりして、明らかに意図的にはずされたこともすごく覚えている】、【小学校から中学校は持ち上がりでメンバーが変わらないので、小学校で私をはぶいた子たちが部活も一緒にクラスも隣で、学校に行きづらい理由は何かしら日常的に結構あったと思う】というコードであった。

⑨【家庭がぐちゃぐちゃしていた】は、【中1、中2と、中3で休んでた頃の違いは部活のパートの出来事もあるが我慢すれば壮絶ないじめでもなかった。その頃も家がぐちゃぐちゃしていて、家庭環境が一番大きいと思う】、【部活の出来事も辛かったが、母が離婚してから、母親が今まで彼氏がずっといて、結構コロコロ彼氏が変わっていた。彼氏と一緒に私も住み、住まない時も会っていた。親の彼氏があまり好きじゃなくて、母親がその彼氏と付き合うたび、お金、人間関係でもめた。それに巻き込まれたことも中3で休んだ原因だと思う】が存在した。

⑫【担任の先生に救われた】に関して、【中学3年間、担任の先生と一緒に、その先生はすごく好きで、今時あまりいない熱いタイプの熱心な先生で、今でも連絡を取る】、【小学校、中学校にしても先生には恵まれていたと今でも思う】、【学校に行けなかったときに夜中に先生の家で電話して何時間も話を聞いてもらった。学校に午前中はいたが、午後は帰りたいたいとき、本当に体調崩したときに、授業をわざわざ自習にして車で家まで送ってくれたので、そういう面でどんな先生でもしてく

れないと思うし、すごく感謝している。先生を嫌だったり、関わってくれることにウザいとも一切思わない。熱すぎる先生で、ほかの生徒に冷められて嫌われて、うざがられる人だったが、保護者にもすごく評判が良かった。私は本当に良かったと思う】が存在した。

⑮ [母親に振り回された] に関して、【中学の不登校では受験もあり、母親が無理やり引っぱり出して、「午前中だけでもいいから学校に行きなさい。」と結構言われた。言われて行くのが嫌で、自分から学校に行くようになったのも多少あると思う】、【学校に行きなさいと母親に言われるのは、家の環境がちゃんとしてない、母親のせいで自分がこうなっている、あんた（親）に振り回されてるという気持ちがすごく強かった。なんでそんな文句を言われると思ったし、今は親と仲良くしてるが、改めて話すとも今でも思う】、【母親のせいで振り回された感じは今でもあって変わらないし、当時をもっと強くあった】、【母親との二人暮らしの時期が一番親の病状が悪かった時期だった。周りの人もそう言う。その頃、母親が訳がわからなくなってしまい、私に暴言を浴びせたり、叩かれたりもした。その話を今すると母親は全く覚えてない。私が覚えている嫌な出来事を共有できない。こんなにつらいことがあったのに完全に忘れられてるのは仕方ないが、不公平とは思った】というコードが存在した。

〔自分のもともとの考え方〕に関しては、⑬ [人に頼るのが苦手だ] と⑲ [完璧主義] のサブカテゴリーに分かれた。

⑬ [人に頼るのが苦手だ] に関して、【私がおもともと人に相談したり、人に頼るのがすごく苦手だった】というコードだった。⑲ [完璧主義] は、小学5年生の時系列でも述べているので割愛する。また、⑩ [友達が少ないが、深く狭く付き合うタイプだ] と⑪ [親とは一緒にいたくない] は独立する。⑩ [友達が少ないが、深く狭く付き合うタイプだ] は、

【クラスでもあまり学校が楽しくなく、友達もそんなに多くなかった。数人の友達と深く狭く付き合うタイプだったので、同じクラスに仲のいい子がそんなにたくさんいなかった】というコードがあった。⑪ [親とは一緒にいたくない] に関して、【中学生以降になって、母親の彼氏の問題に巻き込まれていたの、親とむしろ一緒にいたくない方向にいった。今もずっと祖父母の家に祖父母と三人で生活している】というコードであった。

不登校以降として、⑰ [常識の枠にとらわれず、色々な選択肢を躊躇いなく決断できる]、⑱ [同年代と接するのが苦手だが、目上の人とは得意だ] に分類された。

⑰ [常識の枠にとらわれず、色々な選択肢を躊躇いなく決断できる] について、【普通の公立全日制高校に入ったが通信高校に転校した。通信は登校日が月に二回しかなく、後は全部自分の時間だった。全日だと当たり前毎日行かなきゃいけないし、その中の人間関係があってそこで過ごさなきゃいけない。だが、通信だとそれ以外の選択肢で、学校に行かないで高卒をとれるし、学校に絶対通わなきゃいけないという考えもあまりなかった。普通なら進路を選ぶときも全日制高校を大体選ぶ。でも、学校や進路を考えると、自分では色々な選択肢があり、通信に行くことも躊躇いなく決められた。これらが不登校の時期に大きく得られたものだ】であった。

⑱ [同年代と接するのが苦手だが、目上の人とは得意だ] は、【不登校後に対人関係や性格が変わったことは今もだが、同年代の子と接するのが苦手だ】、【学校を休んで入院してた時、もちろん周りは先生や大人との関わりばかりで生きてきた。同い年の友達、主に集団で同年代ばかりいるところにいることがすごく苦手である】、【自分が学校にあまり楽しかったイメージがない。成長過程で、嫌で学校に行ってなかったから、今でも年上の人、大人、大学の先生と接したり、話したり

する方が楽で得意である】、【克服しなきゃと思うが、今でも同年代と接するときは苦手意識を持っている】、【同年代と対等に接するのが苦手で面倒くさい。ずっとはぶかれていたのもあって、大学ではあまり学校に来てもわざわざ友達と一緒に座らなくても、適当に一人で座って受けることができる。別に群れなくても私は平気なタイプなので、大学に入ってすごく楽だと思った部分もある】、【○(学科名)だとグループワークが多いから仲良くなれるが、それ以外は敢えて友達と一緒にいて、ご飯を食べることは、あまり好まないし、自分が楽な方へ流れてしまうものもある】、【大学で友達がグループですごく和気藹々としてることにうらやましいと今はあまり思わない】、【大学入ってすぐサークルの勧誘があり、大学入ればサークルにも入るイメージがあった。でも面倒くさくて、結局入らなかった。今になって周りがサークルで何かしているのを見ると、そういう生活もあるんだ、大学生っぽいと思う。自分もそうなりたいかと言われるたら別にそうじゃなくていいと思う】、【不登校の経験があったから、大人や目上の人と接することにあまり感じないのは強いところだと思う】、【大学の先生の研究室にも気軽に遊びに行けるし、バイト先の人や、役職に何かついてる人も、ついてない人も、10～20歳、年が離れている人でも気負いなく、普通に接していけるのがいいのか悪いのかはわからない。だが、同年代でない大人と接することができる環境に小さい時からいたのは多少今はプラスと思う】、【目上の人はある程度敬意をもって接するし、覚悟もできる。対等だと返ってくる答えが結構ストレートだったりする】が存在した。

カテゴリーの関係は、小学5年生では、①【家庭環境がめちゃくちゃだと感じていた】と②【母親が大好きで、ずっと一緒にいたかった】が対立している。②【母親が大好きで、ずっと一緒にいたかった】が影響し、③【学校に

行きたいというのは、やっぱりあまりなかった】が存在している。④【クラスの中で省かれて、疎外感・不信感を感じた】が影響して、③【学校に行きたいというのは、やっぱりあまりなかった】がある。⑤【担任の先生に見捨てられていないから、学校とのつながりを感じた】と⑥【修学旅行には行きたかった】は、③【学校に行きたいというのは、やっぱりあまりなかった】は相反している。⑦【勉強の遅れへの不安】は独立している。そして、⑭【精神科の閉鎖病棟への入院では、大人ばかりで非日常的で楽しかった】は、③【学校に行きたいというのは、やっぱりあまりなかった】に影響する。

次に、中学3年生では、⑧【学校の仲間から省かれて、学校に行きづらい】と⑫【担任の先生に救われた】が対立している。⑨【家庭がぐちゃぐちゃしていた】と⑮【母親に振り回された】がそれぞれ影響し、⑪【親とは一緒にいたくない】が生じている。⑧【学校の仲間から省かれて、学校に行きづらい】は、⑩【友達が少なく、友人とは深く狭く付き合うタイプだ】に影響している。⑬【人に頼るのが苦手だ】は独立している。

最後に、不登校以降として、⑯【ショックな出来事があって、その当時の出来事を思い出せない】、⑰【常識の枠にとらわれず、色々な選択肢を躊躇いなく決断できる】、⑱【同年代と接するのが苦手だが、目上の人とは得意だ】がそれぞれ独立している。

そして、⑲【完璧主義】は小学5年生と中学3年生の2つの不登校の年代で関わっている。小学5年生、⑲【完璧主義】は③【学校に行きたいというのは、やっぱりあまりなかった】に影響している。

【考察】

Aさんのインタビューの分析から、母親や祖父母や妹の対応には文句がなかったとある

ように、家族という環境要因は不登校ではあまり関連がなかったと推察される。学校での「いじめ」、「いじめに対するクラスの反応への不信感」という環境要因によって、ほぼ不登校が引き起こされたと考えられる。しかし、反感は持ちつつも、一方で母親のAさんに対する「休んでいるなら、外で遊ぶな。」の言葉に素直に従っていた。自分をあまり話さないタイプと述べ、性格で受動的なように、Aさんの対人関係という個人要因も不登校に関係していると思われる。Aさんは、環境要因の方が性格・対人関係の個人要因よりも不登校に強く関係しているのではないかと推察される。以上から、Aさんはいじめが不登校のほとんどの要因であると述べているが、一概にそうだとは言えないようにも見受けられた。勉強面での遅れに対する余裕も、学校に行かなくても大丈夫だという要因になっていたのではないかと考えられる。また、家族・先生の対応が良かったり、いじめ・不登校の最中でも話しかけてくれる友達が存在し、信頼感があったが、個人要因として、消極的な態度が見えることから、友達に頼ることが出来なくて、不登校が持続したのではないだろうか。そして、いじめという環境要因よりは信頼できる大きさが小さかったと考えられる。また、二番目に大きなカテゴリーとして、〔友への不信・信頼〕、〔人前が出る・外出することへの葛藤〕、〔家族それぞれを認める〕があるように、環境要因とはほぼかぶるが、人との関わりも不登校にかなり影響を与えているのではないかと推察される。さらに、不登校経験後は、自分がダメな奴に見えるのではないかと劣等感があつたり、傷つきやすくなりつつも、それを乗り越え、人の心の動きに対する興味や対人関係を広くつなげていきたいなど、積極的に考えることが出来るようになったようだ。

次に、母親や姉とともにBさんが、父への嫌悪・恐怖があつたことから、家庭での暮らしが常に暗く・緊張状態であり、ネガティブ

思考へとつながったのではないかとと思われる。Bさんは、祖父が亡くなったことが不登校のきっかけであつたと述べている。また、父親という環境要因が強かったと考えられる。強く影響はしていないと考えられるが、姉の不登校を見て不登校への抵抗や不登校に対する拒否感が薄れたのではないかと推察される。しかし、これのみならば、学校を逃げ場にすれば良かったのではないかとと思われる。友達はいたが、クラスにあまり溶け込めず、担任は、一回Bさんが学校に行かなかった際に、「また、来ないんじゃないかな。」とBさんの友達に何気なく言ったことで、次第に父やクラスの人、担任の先生を不信を感じ、敵と認識し、不登校が続いたと思われる。父親という家族の環境要因と学校（担任・クラスの対応も含める）という環境要因の2つがBさんの不登校の要因であると考えられる。しかし、2つより強くはないと思われるが、もともとBさん自身の性格が暗めで、自分より周りの反応を過敏に気にしてしまうところを見ると個人要因もある程度は不登校に関係していると推察される。また、嫌なことから不登校という方法で自分を守っていたと自覚しているように、直接的対決が怖かつたと思われる。そして、Aさんと同様に、仲の良い友達や母親に不登校の時に助けられたと話しているが、消極的な態度が垣間見える。Bさんも、少し母親や友達に頼ることが出来れば、不登校が持続しなかったのではないだろうか。さらに、Aさんにはなかつたが、父への恐怖や祖父の死などがあつて、学校に行けない理由がBさん自身の中で整理が出来ていないこともわかつた。整理が出来れば、より客観的に不登校や自分を見直すきっかけになるだろう。そして、不登校を経験し、Aさんと同じく、人とのコミュニケーションを強くしたいという考えが生まれているので、必ずしも不登校が悪い方向にばかり、転がっているようには見受けられない。

Cさんは、小学5年生と中学3年生の2回、不登校を経験している。まず、病気で入院を繰り返している母親という環境要因が一番大きかったのではないかと述べている。Cさんが、小学5年生と中学3年生の時期の学校で、クラスから省かれていたとはいえ、強く影響しておらず、むしろ母親が不登校の要因として大きく関わっていると述べているし、母親の影響が大きい出来事が多く述べられていたからである。母親の入院で、精神科の閉鎖病棟において、学校に行かなくても、非日常的で楽しかったため、あまり学校に行かなくてもよいと感じていたのではないかと述べている。さらに、小学5年生の時の不登校の場合、母親と離れたくない依存的な思いがあったが、中学3年生の不登校時のCさんの母親への思いは、全く反対になっている。そして、母親に振り回されたという感覚が強くなっていった。しかし、振り回された感じはあるものの、そこから自分の将来を考えるという客観的な視点から、今までの母親との関係を振り返ることが出来つつあるように見受けられる。さらに、Cさんが自身を完璧主義で、テストで1位を取りたいのに取れない、学校に一回休んでしまうと完璧な授業ノートが作れないと語っている。稲村（1988）の不登校児の性格傾向で完璧主義が上位に挙げられることから、この性格はある程度不登校に強めに起因すると考えられる。クラスの人に省かれたのに対し、小学校、中学校の時代にしても、担任の先生が熱心で、家に来たり、電話に付き合ってくれたり、学校とのつながりがあったことが非常に学校との関係を切ることなく、生活できたと考えられる。逆にそこで学校とのつながりを感じたからこそ、学校に行くことが強く刺激されたのではないだろうか。同年代の人と対等に関係を作るのが苦手で、むしろ目上の人との対人関係の方が楽だと思ったのも、不登校のおかげで、常識の枠にとらわれず、色々な選択肢を決断できるようになった。必ずしも悪い

影響だけではないように思われる。さらに、修学旅行には行きたいと考えており、AさんやBさんと同じく、Cさんも、学校に行きたい思いは存在したと考えられる。Bさんにもあったように、母親や学校でショックな出来事があり、不登校の辛かったことがなかなか思い出せないのもあった。

3人のインタビューの結果から、共通のものについてまとめた。家族や学校などへの不信・信頼が同じくあったことがわかった。そして、不登校の場合、不信の方が大半を占めているようである。不登校の状態像として、対人関係での不信はかなり影響するのではないだろうか。ここで印象深いのは、不信がありつつも、3人とも信頼できる存在がいたということである。不登校経験者本人は、その存在をなぜか、強く頼ることが出来ず、不信の内容の方に強く反応するのである。これによって、不登校は発生、または継続するのではないかと。信頼している存在にさらに頼りたいとは思いつつ、その人への申し訳なさなどから、もう一步踏み出せずにいるのではないかと。それは、今回のインタビューでは出てこなかったが、もしかすると、不登校経験者の共通する性格というものがあるのかもしれない。「遠慮」などが例として挙げられる。逆に言えば、信頼できる存在にさらに助けを求めることが出来るアプローチが、これからの対策として必要であろう。

不登校の要因で、3人とも環境要因がかなり強かったのが共通する。また、消極的、あるいは弱気な態度が、環境要因をさらに進ませていることが伺われるため、性格や対人関係など個人的要因も無視できないであろう。さらに、3人は学校をつらい出来事があった休みたいという考えはあるかもしれないが、学校に行かなくて構わないとは思っていない。また、不登校の中でも学校に行きたくて様々な活動を行いたいとは思っていたようである。そして、不登校の体験後、ある程度、自

分の対人関係や将来を見直すことが出来ているのも事実であるから、不登校から得られたものもあるようである。不登校が必ずしも全て悪いとも言いきくいであろう。

さらに、3人全員ではなかったが、Bさん、Cさんの二人に「ショックなことがあり、不登校など辛いことが思い出しにくい」ことが見受けられたのが、印象的である。おそらく、彼らの中で、不登校というものがまだ完全に客観視できるところまで行ってないのではないか。また、不登校が大きな課題として残っているのではないだろうか。

以上のことから、性格や対人関係は不登校にある程度、関係すると考えられ、無視は出来ないであろう。個人要因（性格など）、環境要因がそれぞれ各自のみで、不登校の要因になるとは到底言えないであろう。

さらに、3人のインタビューの結果などでも述べたが、そこで挙げられた性格は、比較的、稲村（1994）が挙げた、不登校の性格に似ていると思われる。あまり当時と変化はないようであった。

【課題】

不登校の共通の状態像は、環境要因が大きく関わっているが、それだけではない。土台に個人要因（主に性格）があり、それ自体が環境要因を進ませていることがわかった。

3人ともにインタビューの内容をグループングしたところ、信頼出来た存在がいたにも関わらず、家族や学校などへの不信が同じくあったことがわかった。これは、本人自体の信頼できる存在への申し訳なさなどがあるのではないだろうか。ここをもう少し次回で、調査したい。

また、不登校と性格および対人関係は関連があることも判明した。その性格は、稲村（1988）の研究での不登校児に見られる性格に、現代においても、比較的似ていること

がわかった。

以上のことから、不登校への支援方法として、本人だけでなく、様々な環境要因にも目を向けることが必要である。また、不登校を経験している本人は、一人で解決するのは難しいと思われるため、消極的だと考えられる生徒・学生に、周りが積極的にアプローチし、信頼関係を築く方が良いと思われる。

複雑に要因が絡み合っているため、不登校からの回復は簡単ではない。しかし、不登校を経験している本人は、どうにかして解決したいと思うのも事実であり、支援方法の模索は急務である。さらに、不登校を経験している本人が要因が何かを把握出来ていないことも、本研究で明らかになった。

最後に、インタビューをした人数が少なかったため、人数を増やし、本研究の内容をさらに深めたい。

《参考文献》

- 花谷深雪・高橋智（2004）. 戦後日本における「登校拒否・不登校」問題のディスコース—登校拒否・不登校の要因および対応策をめぐる言説史— 東京学芸大学紀要1部門, 55, 241-259.
- 保坂亨（2002）. 不登校をめぐる歴史・現状・課題 教育心理学年報 41, 157-169.
- 石川瞭子（2000）. 『不登校と父親の役割』 青弓社.
- 五十嵐哲也・萩原久子（2004）. 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連教育心理学研究 52（3）, 264-276.
- 稲村博（1994）. 『不登校の研究』 新曜社 小泉英二編『登校拒否-その心理と治療』 学事出版 1973.
- 松井美穂・笠井孝久（2012）. 不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの—不登校経験の意味づけと影響— 60, 55-62.
- 松井美穂・笠井孝久（2013）. 不登校経験者の不登校経験の意味づけとその影響 —「問題」のとらえからみる支援のあり方— 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 77-86.

- 松井理納・稲垣応顕 (2008). 不登校経験者の自己省察に関する研究 (2) 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 2, 95-101.
- 松坂文憲 (2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味”～“自己資源化の可能性”の提案 岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要, 19, 39-56.
- 文部科学省 (2003). 不登校への対応について 文部科学省初等中等教育局 児童生徒課.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2011). 平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 46-64.
- 佐藤修策 (1968): 登校拒否児 国土社.
- 田垣正晋 (2008). これからはじめる医療・福祉の質的研究入門 中央法規出版株式会社
- 東條光彦 (1995). 不登校児に見られる性格 児童心理 49 (15), 150-154.
- 谷津裕子 (2013). Start Up 質的看護研究 学研メディカル秀潤社, 97-171

